

山田方谷

- 上杉鷹山の改革を凌ぐ藩政改革を成し遂げ民百姓から生神様のごとく敬われた人
- 越後長岡の英雄河井継之助が三度土下座をして師と仰いだ人
- 幕末の最も著名な陽明学者
- 明治政府からの出仕を断り続けた人
- 勝者の歴史に忘れられた人物



山田方谷／年表

文化2(1805)年	備中松山藩、阿賀郡西方村（現・高梁市）に生まれる。名は球、通称安五郎、号は方谷 5歳の時、新見藩・丸山松陰塾に入門（～16歳まで） 14歳で母死去、15歳で父死去のため家業を継ぐ
文政8(1825)年	21歳、松山藩主・板倉勝職から抜擢、藩学問所への出入りの許可、京都遊学
文政12(1829)年	25歳、名字帯刀許可。藩校有終館会頭となる
天保4(1833)年	30歳、江戸・佐藤一斎塾に入門／天保の飢饉始まる（～1837年）
天保7(1836)年	32歳、帰藩。藩校有終館学頭となる
嘉永2(1849)年	45歳、板倉勝静藩主就任。元締役・吟味役に登用される 翌年より藩政改革スタート
嘉永6(1853)年	ペリール来航。翌年、藩の参政に就任
安政5(1859)年	安政の大獄 勝静、幕府最後の老中となる
明治元(1868)年	明治維新。敗戦処理をしながら長瀬塾を開く
明治10(1878)年	70歳死去

三島中洲

方谷の一番弟子。14歳の時に牛麓舎に入門。二松学舎（大学）設立。東大教授、大正天皇の侍講。宮中顧問官となる。明治三大文宗の一人。

※文宗…文章・文字に優れ、祖と仰がれる人。大家（漢学）

「惜しいかな蕃山。末路蹉跎す。これを方谷にくらぶれば、徳において欠くるある。ああ、盛んなるかな、終始完全なること。」

秋月悌次郎

会津の副軍事奉行。のちに東大教授となる

「その人となり朴淳遜讓。一見田舎爺のようであったが、藩君が時事を諮問されると論壇風発、いちいち肯綮にあたり、布帛米穀はもとより茄子胡瓜の時価まであげて論及し、真に経済の全才であることを知った」

方谷：

王陽明（陽明学）を学ぶ上で大切なことは、王陽明の**根本的な精神**を理解することである。

その**神髓を見極める**ことである。その神髓から発したに違いないが、個々の具体的な仕事ぶり、その業績や政治的活用の運用面にばかり目を奪われると、**今の世に適さぬ模倣**となってしまう。

至誠に基づき神髓を見極めることこそ大切で、ただ区画の末だけを真似て、円い穴に四角な臍（ホヅ）をはめ込もうとするようではせっかく王陽明全集を手に入れた価値がない。

…弟子・河井継之助との別れの言葉



幼少～青年

- 山田家（農業／行灯の灯油製造販売）は御家復興のため質素儉約と教育熱心な家庭
- 3歳で漢字を覚え、4歳で額字が神社に奉納される
- 5歳の時、新見藩の丸川松陰塾に入門（～16歳まで）



丸川松陰

- 高名な朱子学者。父が訴訟で江戸行き留守中に母が発狂。13歳の時から18年間看病。孝義録（江戸幕府が全国調査した善行者の記録）に名を連ねる
- 佐藤一斎（昌平校）とは大阪の中井竹山塾で同門。老中松平定信が学官登用を推すも断る。没後、佐藤が碑文を書く

徹底して朱子学を学ぶ

- 幕府の官学
初等教育「小学」→四書（大学・中庸・論語・孟子）→五経
- 9歳の時、客人が方谷に「坊や、何のために学問するの？」と尋ねると
「**治国平天下**」と答えた

儒教の学問の最終目的は「**聖人君子**」になること

家庭に恵まれず

- 14歳の時、母が病に伏す。駆けつけて声をあげて泣く方谷に母曰く
「私のことは心配しなくて良い。お前には学問の道がある。
ぐずぐずしないですぐに丸川先生の元に帰りなさい。」
- 自分の命よりも**高次の目的**に役立つことを誇りとする武士道精神は
男性だけでなく女性にも求められた時代
- 10日後母死去
- 1年後父死去→学問断念、家業を継ぐ

松山藩主・板倉勝職（カツツネ）の抜擢

- ・二人扶持の奨学金をもらい、藩学問所の出入りの許可（人材登用）

儒教について

祖先崇拜と祖霊信仰を核とする原始宗教を源にし、

招魂儀礼を基礎として一大理論体系を孔子が作る

五経：中国最古の文献。孔子が編纂した儒教の教典。

- ①詩経（中国最古の300編の詩集）
- ②礼記（儀礼に関する書物）
- ③春秋（孔子が居た魯の国の年代記）
- ④易経（占いの手引き）
- ⑤書経（伝説時代～周までの政教記録）

四書：論語・孟子・大学（君子になるための手引書）中庸（節制・均衡・調和を説く）

宋学派

南宋の朱子（12世紀）が中心。儒教を宇宙論・形而上学（哲学）に発展させた

「よく考え、理を究め、つかんだら動け」

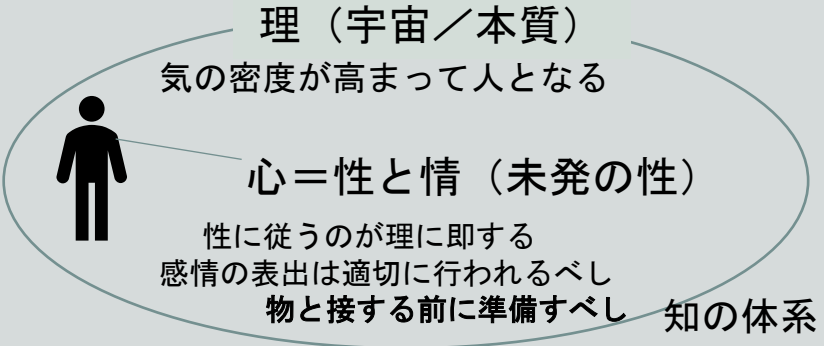
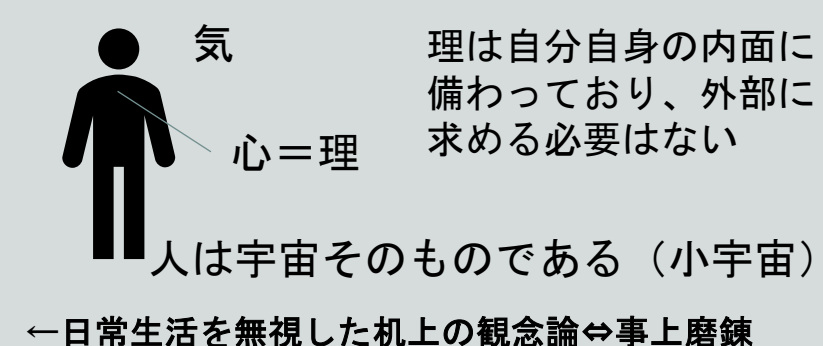
先師孔子行教像



陽明学とは

王陽明（1472～1528年）

- ・ 中国の明朝時代の武将。敗北なし。儒学者であり朱子学を批判。陽明学を樹立。
- ・ 孔孟の教えに戻る「君は民のためにある」
- ・ 「つかんだら動いているはず。動くとき学ぶは一体」
- ・ 人との語り合いの中で思想や精神を伝えた。状況・相手の性格・人格・才能・教養に応じて言葉を変えた

朱子学（理気二元論/性即理）	陽明学（心即理）
 <p>理（宇宙／本質） 気の密度が高まって人となる</p> <p>心＝性と情（未発の性） 性に従うのが理に即する 感情の表出は適切に行われるべし 物と接する前に準備すべし</p> <p>知の体系</p>	 <p>気</p> <p>心＝理</p> <p>理は自分自身の内面に備わっており、外部に求める必要はない</p> <p>人は宇宙そのものである（小宇宙）</p> <p>←日常生活を無視した机上の観念論⇔事上磨錬</p>

陽明学の教え

- 人は私欲に曇っていなければ**天の理**そのものである
→ **良知**
- 良知の本来の姿を自覚して発現していく (**至良知**)



自らの精神の解放と自我を強烈に主張

人間の心の自由と独立（中世は欠如）

人は皆努力すれば聖人君子になれる（知行合一）

朱子学／観念的・理論的（我が心の内を捨てる）に息苦しさ

陽明学／「我が心の内を大切にする」に共感

→ 偏るリスク有り、しかし人間性の本質に素早く入れる

ちなみに、日本の陽明学信奉（探求）者は

中江藤樹（始祖/近江聖人）、熊沢蕃山、大塩平八郎、春日潜庵、
吉田松陰、高杉晋作、久坂玄瑞、西郷隆盛、河井継之助、及木希典、
三島由紀夫

佐藤一斎塾入門

- 天保4年（1833年）、丸川と師弟対決。29歳、陽明学を学びに江戸へ

佐藤一斎（当時63歳）

- 幕末の学界の巨頭。東の一斎、西の大塩。昌平校塾長
- 表向き朱子学、実際は陽明学
- 佐門の二傑／陽明学・山田方谷と朱子学・佐久門象山
- 方谷、塾頭になる
- 天保6年、天然痘を患い瀕死
- 32歳、理財論（小論文）を書く（帝王学）



方谷／陽明学の神髄に辿り着く

至良知 $\xrightarrow{\text{そのためには}}$ 誠意

明鏡に曇りをなくして
善悪を判断する心

実践努力
格物（正しく行動する）

（春日に宛てた手紙）

もし君が王陽明の学問を志すというなら、王陽明の言葉よりもその人となり（生き様）を学ぶべきです。

弱小者が王陽明の学説に口を借りて悪戯に雄弁奮って人を圧倒するのを見ますが、その本人はしばしば高慢不遜なだけで、人道をわきまえた者はあまりにも少ない。

彼らは陽明学の学び方を間違えたのです。

帰藩、藩校「有終館」の学頭就任

私塾「牛麓舎」設立

- 一人娘病死。妻は転換神経症（ヒステリー）
- 天保8年、大塩平八郎の乱（東北大凶作で4.5万人／年餓死者）
- 天保12年「天保の改革」スタート（老中水野忠邦、2年で失敗）
各地の藩政改革もほぼ失敗（米沢藩・上杉鷹山のみ）
- 天保14年、三島中洲14歳で入門

三島中洲

- 二松学舎設立、東大教授。大正天皇の侍講、官中顧問官。明治三大文宗の一人
- 毎年元旦に沐浴して身を清めてから（**遺言**）を書いた
「遺言書は元気な時に書くものだ」

板倉勝静（カツキヨ）との出逢い

- ・ 勝静20歳の時、桑名藩松平家（祖父松平定信）より板倉家へ婿養子
- ・ 学頭方谷（40歳）、厳しい態度で勝静に帝王学を指導

勝静「唐徳宗論」（君主は如何に在るべきか？）を書いた時

方谷「この論文をいただきたい」

勝静「なぜ？」

方谷

「文章は誠であり、真実を語るものでなければならない。後日藩主となられた若君の言動とこの書が一致するかはその時判断する。この徳宗論と反する言動があれば、この文章は虚言であり誠がない証。その時若君を責める材料としてこの論文をもらい受けたい。」



勝静 深く頷き声を立ててさわやかに笑った。

「後日の証文としていただきたい」

方谷 胸震え、舌を巻き、微かに呻る。

「まさしく只者ではない」

「政策や言動を諫め、忠告する諫言の臣下が存在してもその忠告を受け入れる余地がないとすれば、それは君主の罪。

自らの保身のために君主に諫言することが出来ないのは臣下の罪。自分自身の自戒のためにいただきます」

方谷が教えた帝王学（政治・経済論）

● 事の外に立つ

・ 大局観をもつ

事の内に屈してはならない。藩の財政が悪いのも、理財を凶るものがことごとく財の内に屈しているからである

餓死を免れるにはまず金だという。皆金を口にしながら至る所に貧困に喘いでいるのは何故か？

目先の空腹を満たそうと利にあがいても一時しのぎにしかない

上に立つ者は、空腹という事の内に屈せずに、事の外から眺め大局的立場から対策・方針を確立していく

・ 義：綱紀を整え、政令を明らかにする「筋を通す」

・ 利：餓死から逃れようと財貨をやたら求めたがる

君子は、義を明らかにして利を計らない、義を明らかにすれば必ず後に利がついてくる（先義後利／孟子「利は義の和なり」）

元締役・吟味役就任

しかし…

- 役人生活（学頭）に嫌悪感
→農民から年貢を搾り取り賄賂のある世界
- 老荘の道家思想「自然に帰れ」→45歳に隠退願

勝静、方谷を前代未聞の破格の抜擢（勘定奉行／財務大臣）

幕閣・老中への野心あり・藩の財政基盤整備

家老らは衝撃人事に怒り、方谷暗殺の噂流れる

藩の財政改革

調査

- 表高5万石、実態は直近平均1.93万石（売上大粉飾）
- 1.93万石－6千石（藩士・領民の渡し米）＝1.33万石
 ≒銀1.9万両
- 江戸藩邸維持管理1.4万両、松山御暮らし3千両、大阪・京都諸入用千両
 ≒1.8万両

負債総額10万両、利子毎年9千両加算という
財政は火の車の状態

藩の財政改革

政策①経費削減

- ・ 上方の銀主に帳簿を公開、**粉飾決算を明らかにする**。借金棚上げ依頼
 - ・ 藩の再建計画を提示「今後借入しない、借りたものは必ずお返しします」
 - ・ 大阪の蔵屋敷の廃止（千両／年）
蔵役人の不正を看破→収納米を松山で保管。藩で売り負債を現金払い
 - ・ 藩士の減俸、中級武士以上と豪農・豪商に儉約令。そのために？
- 方谷自ら一般藩士以上の減俸、自分の家の会計出納を全て第3者に委任
- ・ 賄賂、酒馳走の禁止、結果

米の売却で3千～6千両利益+維持千両負担減

凶作時に農民の餓死者や百姓一揆がピタリと止む

藩の財政改革

政策②産業振興

- ・ 米以外の生産物（特産品／煙草・紙・柚餅子）を**専売制**にして一極管理（豪商×）
- ・ 鉄製品（農具・鉄器・釘等）の工場建設

前半3年は血みどろの金策。大阪に卸さず江戸で直売



3年目で1万両、4年目で3万両の利益

銀主への返済前倒し、道路・河川の整備。旅人驚く

藩の財政改革

政策③藩札の改新

- ・ 諸藩は正貨（幕府発行）を交換制で藩札を発行するも正貨を使い込んでしまっていた
- ・ 嘉永5（1852）年、5匁札を藩で買い取り、船上で燃やす一大デモンストラーション決行

藩の信用取り戻す



新しい藩札「永銭」を大々的に発行

正貨と紙幣の価値の高低がなくなり、他藩にまで使われる

松山藩庫に正貨が積み上げられる→返済&新規事業投資

その他の藩政改革

文武奨励

- 士気を高める
- 軍制改革
 - 農兵制導入（人口5万人弱、士族5%、農民80%）
1200名の西洋式軍隊に育成（長州・奇兵隊の発想の元となる）
- 学校設立
- 藩士の移住計画実施
 - 開墾+要害の地の防備強化（北海道の屯田兵のさきがけ）

わずか7年で10万両の負債→10万両の貯蓄
20万石と評判になる

松山藩、参政となる

- ・ 藩主の代理、藩行政の最高責任者
- ・ しかし身分は家老に準じたものに据え置き（前例なし）
- ・ 安政2（1855）年、他藩士との酒席で

「徳川幕府崩壊」を予言

一同衝撃、息を呑む

方谷の危機

- ・ 安政4（1857）年、勝静（35歳）寺社奉行栄職のチャンス

方谷 「 お手入れを使ってまでの就任はやめてください 」



方谷批判の嵐

方谷の真意は？

「勝静を幕府に深入りさせたくない」

+

藩士移住計画への反発、方谷暗殺の噂

+

私生活の浅幸

隠棲の道

- ・ 安政4（1857）年、勝静、寺社奉行に就任（お手入れなし）

方谷、複雑な心境、身を引く結論

- ① 備中松山に帰らなければならなくなる
- ② 藩士移住計画の見本となり帰農する
- ③ 後進に道を譲る

人間の進退は、「**義**」に照らして決めるのみ

元締役は解かれるも、参政の地位は解かれず

激動の幕末、明治へ

- 嘉永6（1853）年 ペリー来航
- 安政4（1857）年 寺社奉行就任
- 安政5（1858）年 安政の大獄。勝静、寺社奉行罷免
方谷、城下から12km離れた山中に居を移す
(家計苦しく)
- 安政7（1860）年 桜田門外の変
- 文久元（1861）年 勝静、寺社奉行に返り咲く
勝静の要請（政治顧問）を断固拒否
方谷吐血、松山戻りを許される
この後7年間幕閣を去るよう進言し続ける
- 文久2（1862）年、勝静老中に異例の出世。方谷を召命

激動の幕末、明治へ

- 文久3（1863）年、松山に帰国
自宅に籠り開墾に励む、登城拒否
- 元治元（1864）年、老中罷免（家茂）
老中に返り咲く（慶喜）
徳川幕府最後の老中となる
- 慶応4・明治元（1868）年 戊辰戦争

方谷、藩主を別に立て新政府に恭順の意を示し
松山藩を戦乱から守る

明治の世で

- ・ 大久保ら新政府からの出仕要請を断り続ける
- ・ 敗戦処理の指示を出しながら長瀬塾を開く

入門者殺到、6棟の塾舎増築

朱子学の講義

- ・ 明治5（1873）年、小坂部に移転

閑谷学校で陽明学の講義全公開（66～69歳）

明治10（1878）年、70歳没。

書籍残さず、漢詩1500首

・塩谷宕陰（シヤトウイン）と安井息軒（幕末の三博士の2人）の議論

「当代で最も優れた人物は一体誰だろうか？」

安井は藤田東湖、塩谷は

「私は山田方谷だと思う。山田方谷は
東湖の人物にさらに学問を加えた人物である」

・明治の雑誌「日本及日本人」

「偉人は独り出でず。一人出ずれば他にも出ず。所謂気運なり。旧幕の末全国通じて活気高まり何の方面にも相応の人物現れたるが、藤田東湖と社会に於ける位置を同じくせしは、佐久間象山及び山田方谷なり」

「山田は内務大臣の器なり。大蔵大臣又は農商務大臣又は文部大臣と為るも可なり」

川田剛（名漢文家、東宮侍読、官中顧問官）

「（中江）藤樹道德ありて功業なし。蕃山功に豊にして文に嗇（シキ・控え目）なり。一斎文を能くして而して徳と行とは及ばず。先生（方谷）三子に於いて長を取り短を裁って別に一家をなす。あに曠世の偉器ならずや」

至誠惻怛

(しせいそくだつ)

誠意を尽くし人を思いやる心

